

# リアルとはひと味違う オンラインマラソン企画

株式会社ファイナシステム（兵庫県加古川市）

## スポーツ計測事業が激減

1980年代、歯科技工所に勤めていた創業者が自社向けの販売管理ソフトを独自開発したことからその歴史が始まった株式会社ファイナシステム。受発注や売り上げなどを管理する歯科技工所専門のソフトで、1986（昭和61）年に会社を設立し、販売を開始した。それが、現在も同社の主力製品のひとつである「いればくん」だ。「歯科技工所専門というニッチな市場でトップシェアを握っています」と取締役COO（最高執行責任者）の山内祐司氏は話す。

その山内氏が入社した1990年代半ば、同社は2つ目の柱となる事業と出会う。マラソンのタイム計測をはじめとしたスポーツ大会の計測業務だ。「当時のマラソン大会では、ストップウォッチで計測したタイムと、手書き

などで控えたゼッケン番号を突き合わせるという方法が採られていましたが、多くの人員が必要で、間違いも多かったようです」と山内氏。より正確で効率的な計測を求めて試行錯誤を重ね、現在では選手のゼッケン、またはシューズに取り付けたいCチップを、ゴール地点のセンサーが読み取り、瞬時に選手たちのタイムをはじめとするデータが取り込まれる仕組みになっている。

新型コロナ禍前、同社は約170のマラソン大会の計測業務を受注。ポット・カヌーの写真判定やアーチェリーの得点集計業務にも携わり、スポーツ関連が売上高の4分の3近くを占めるまでに成長していた。しかし、新型コロナウイルスの感染拡大で、全国のマラソン大会は相次いで中止に追い込まれ、同社のスポーツ関連の売上高は2割以下に縮小。これらの業務を扱うスポーツイベント事業部は一時休業にまで追い込まれた。

## 自由度が高く、企画も多様に

「ピンチをチャンスに変えよう」と社内を鼓舞した山内氏。そうして生まれたのがオンラインマラソン大会だ。山内氏は「ランナーは励まし合って走り、健闘をたたえ合うことに喜びを感じる人が多く、その機会を奪われてモチベーションが低下していると予想されました。そこで、ランナーたちがオンライン上でつながれる大会としてオンラインマラソンやウォーキングが効果的と考えました」と振り返る。

大会名を冠した特設サイトで参加ランナーを募集。ランナーたちは定められた期間内の都合のいい日時に定められた距離を走る。コースは自由。スマートフォンのGPSウォッチなどで距離とタイムを計測し、走行後に自分でタイムを入力すると、集計されてランキングが表示されるというシステムだ。

自社による主催のほか、他企業が主催する大会の運営も受託したところ、新しいタイプのマラソン大会と評判を呼ぶ。また、オンラインならではの良さも浮かび上がってきた。

「好きな時間に好きな場所を走れるという自由度の高さに加え、会場までの交通費が不要で、大会参加費も格安なため、費用負担を抑えられます。加えて多様な企画を立てられるのもオンライン大会の強みです」

### プロフィール

- 所在地：兵庫県加古川市加古川町平野
- 事業内容：システム・ソフトウェア開発
- 代表取締役CEO：塩原正也、取締役COO：山内祐司
- 従業員数：37人

### 新型コロナ ミニ情報

#### 続くランニングブーム オンラインが受け皿に

スポーツの大会やイベントは新型コロナウイルスの感染拡大で深刻な打撃を受けた。

当初2020年夏に開催予定だった東京オリンピック・パラリンピックが1年後に延期されたのははじめ、プロ野球は2020年度、開幕が6月に2カ月ずれ込んだうえ、当初は無観客で開催。徐々に制限を緩和したが、翌2021年度まで入場制限は続いた。その結果、公式戦1試合平均入場者数は2020年度が前年度比78.3%減の約6,699人、2021年度も2019年度比70.5%減の約9,138人と低迷。入場制限がなくなった2022年度は同2万4,020人（8月28日時点）まで回復したが、なお2019年度の3万929人には届いていない。

ランニングブームを受け、全国各地で増えている市民マラソンやランニング大会も軒並み中止や延期、規模縮小に追い込まれた。ただ、笹川スポーツ財団の2020年の調査では、年1回以上のジョギング・ランニング実施率は10.2%、推計実施人口1,055万人と調査開始以来最高を記録。人気はむしろ高まっている。リアルな大会に替わるオンラインマラソンの開催はそうした層の受け皿として大きな役割を果たしたとみられる。

たとえば、地域対抗、企業対抗といったチーム戦でタイムを競ったり、大会ルールを投票で決めたりするのもオンラインなら簡単だ。また、企業にとってもスポーツ用衣料品などを無料提供し、それを使って走ってもらった感想を投稿してもらおうといった企画も容易に実行に移すことができる。

一方、2022年に入ってからリアルな大会も復活しつつある。その土地の風土に触れ、参加者と生で交流できるリアルの良さはもちろんある。「だが」と山内氏は言う。「リアルにはリアルの良さ、オンラインにはオンラインの良さがあり、新型コロナウイルスの感染収束後も両立できるのではないかと考えています」

その時々気分や都合にマッチした参加スタイルを選べる時代が訪れるかもしれない。



様々なスポーツ大会を同社スタッフが線の下力持ちとして支えている。



オンラインマラソンの可能性を追求する山内氏（左）。オンラインマラソンの記録証見本（中央）。工夫を凝らしたオンラインマラソンが開催されている（右）。

